



大阪市立大学  
工学部同窓会

# 大阪市立大学工学部同窓会報 第6号

## 同窓会だより

1986年11月25日  
大阪市立大学工学部同窓会  
〒558 大阪市住吉区杉本3丁目  
3-138 TEL 06(605)2651 呼出  
発行人 足立幸一

### ごあいさつ

同窓会会長 足立幸一



皆様には、ご清祥に、ご活躍のことと存じ上げます。

工学部では、創立40周年記念事業が、記念式典、記念講演、記念事業募金活動と続いておりました。間もなく、ひとつの区切りになります。来年には、記念事業の工学部学術交流センターが実現される予定です。

工学部長、事業委員長、後援会長を初めとしまして、委員会、後援会、工学部教職員で推進をしていただきました方々、同窓会の方々と、まことに多くの方々による賜物であります。同窓会としまして、皆々様に深く感謝を申し上げます。

大学全体と関連しまして、他学部関係の同窓会は、それぞれに歴史は厚く、活躍されています。公立の総合大学として出発後でも、相応の年輪を重ねました。それぞれの同窓会単位間のコミュニケーション、協調、連携を望む気運が出ております。これをどのような形態で実現化していくかは、これまでの経緯を配慮しながら、皆様とともに進められるものと考えています。

本同窓会内では、卒業生が多くなり、東京在住の会員の方々がふえ、工学部同窓会関東支部の設立が進められています。各学科の同窓会では既にそのような会が催されておられることと思いますが、それらの連合によってお互いのコミュニケーションが促されるなど望ましいことが多いものと思います。よろしくご配慮くださればと思っています。

このように若干の点からみましても、本同窓会関係におきますコミュニケーション網は、広く厚くなりつつあります。

一方、昨年の会報でも感じられますように、工学部も将来像に向けて歩んでいます。本同窓会も、工学部50周年に向けて、発展し出していると思われれます。

年々巣立たれる新しい卒業会員を、暖かく受入れながら、発展させたいものです。

どうか御健康に十分留意されまして、気長に本同窓会の催し等に御協力と御鞭撻をくださいますようお願い申し上げます。

(建築・昭和29年卒・大阪市建築技行協会工務部長)

### 同窓の皆様へ

名誉会長 安藤 慶一



本年3月末に木村英一学長が任期満了で御退職になり、4月1日より経済研究所の崎山耕作教授が新学長に就任されて早や半年を経過しました。年度早々来年度から実施されます新しい入学試験方式に関する問題や、大学進学人口

増に伴う入学定員の臨時増の問題などが審議され、前者に関しては「Aグループ」への参加が、後者に関しては工学部では30名増がそれぞれきまりました。

40周年記念事業の工学部学術情報交流センター設立に関しましては皆々様に多大の御協力を頂きまして誠に有難うございました。御寄附頂きました額は目標のほぼ8割に達しまして、来春の竣工を目指して現在作業が進められております。このセンターは学部内外の教員・研究者らが相寄り、学問・技術の諸問題について談話・討論することによって学際的発想の芽を育てる場であり、また地域社会との交流の接点にしようとするものでありますが、もう一つの大切な役割は同窓の皆様と学部構成員との懇談の場とすることです。いつでも気軽に大学へお立寄り頂き、四方山のお話を通じて御鞭撻頂きたく存じております。

学部の教育・研究活動は年々活発になってきておりますが、この10月31日には応用物理学科の鶴飼正二助教授が「非線型 Boltzmann 方程式の数学的研究」により昭和61年度の大阪科学賞を受けられ、また土木工学科の三笠正人教授と高田直俊助教授は「土質工学における遠心力模型実験の開発と応用」により本年5月に土質学会の技術賞を受けられました。誠に御同慶の至りであります。

大阪市の行財政改革の波は大学にも波及し、原子力基礎研究所は昭和63年度をもって閉じられることになるなど厳しい環境ではありますが、同研究所のスタッフの御協力が得られますれば、かねてより計画中の大学院独立専攻の設立を推進するべく目下努力致しております。

大阪市には3年後に迎える市制100周年の記念事業の目玉として「テクノポート大阪」計画があり、その一環としてバイオテクノロジー、エレクトロニクス、メカトロニクス、新素材、海洋開発およびエネルギー開発など

の先端技術開発のための研究所を含むリサーチパークの開発が進められていますが、我が工学部は将来これらの研究所と有機的に連携してこれら研究所の中心的な研究機関となり、研究の質と規模において自他共に認める大工学部に発展できればと祈念しています。同窓の皆様には何卒よろしく御後援の程をお願い申し上げます。

(工学部長・電気工学科教授)

## 学生就職雑感

兵働 務



工学部学舎前の木々の葉も色づき始めました。春夏秋冬それぞれの風情も感じられ、20年前建設された頃に比べると校舎も古くはなりましたが大学らしい環境に近づいています。卒業生の皆様、今年は特に不況のさざしを感じる中で

懸命の努力を続けておられることと思います。人も会社も公共団体もすべてがその真価を問われる時代が到来して来たようです。

来年3月卒業の学生諸君の就職予定の見通しも得られました。求人に来られる会社の方々の中に卒業生も多くなり是非という要望に仲々応じきれないのですが、私共としては本当に有難いことと思っています。これらは卒業生の皆さんの社会での十分な御活躍のお蔭と感謝しています。しかし相変わらず大企業指向です。中小企業の中にも世界的水準に達しているところも多くあることを思うと卒業生が大小の企業を問わず広い分野で活躍されることも大切だと思っています。

私の知っています滋賀県の小さな企業の社長は特攻隊の生き残りの一人ですが使命感にあふれ、戦後化学繊維用のノズルの穴あけに命をかけて出発されました。ステンレス材のノズルに0.2mm~0.3mmの穴をあける事は大変難しいことですが、新しい独自の技術を開発されました。この技術はある大学の先生から不可能と宣言されていたということです。現在では穴あけ以外の種々な方向に進展されておられますが、現在西ドイツのある会社をいま一息で追越し、世界のトップに向かって挑戦されています。この社長から“流れ星が流れる間に願い事を三つ言うことができれば願い事はかなえられる”というのは事実であると聞きました。それ程、一事を一瞬たりともおろそかにせず考えぬく事の大切さを教えられ、私はその真剣さに頭が下がりました。創業以来営業マンのない会社として大企業よりの相談と注文に応じ切れない日々が今なお続いているということです。

おわりになりましたが機械工学科では本年新しい装置(サーボバルサー)が上田教授の研究室に設備されました。人事では10月1日付で南斎征夫先生が助教授に、4

月1日付で野邑奉弘先生が講師に昇格され、熱工学及び化学機械研究室に西村伸也氏が助手に採用されました。永年勤続された教授藤井太一先生と教授東野一郎先生が来年3月停年を迎えられます。これを機に機械工学科の同窓会を結成してはどうかとの声が上がっています。連絡その他よろしく願い申し上げます。皆々様の益々の御活躍と御健康を祈ります。(機械工学科主任教授)

## 電気工学科近況

志水 英二



先生方と4MのDRAMのサンプルを誰かが入手したとかしなるとか話しているところに、卒業生が訪ねて来て、「私は16Mの開発の仕事をしています」と打ち明ける等々、なんとも激しい技術進歩の流れの中で10年先を見通したテーマはこれしかない

と各研究室、各先生方ともそれぞれの分野で産業界とは異ったベクトル方向を指向しつつがんばっております。

この10月に電気機器学講座担当教授として大阪府立大学工学部電気工学科より藤井知生先生をお迎えすることができました。先生は、電気機器の分野での最先端の一つであるパワーエレクトロニクスの我国における代表的な若手研究者のお一人で、講義は「制御工学」を3回生に、「電気機器学特論」を大学院生にさせていただいており、電気工学科の研究・教育が一層充実しました。また、卒業生諸君のこの分野での難題について適切な御助言をいただけたと思います。

研究設備では本年3月に工学部重点備品として電気計測工学研究室にプレーナマグネトロンスパック装置、電子回路研究室に単分子膜作製装置、人工知能形データ処理装置が備えつけられ、それぞれの分野での研究成果を御期待下さい。

電気回路学講座〔堤四郎教授、鈴木裕講師、南繁行助手、4回生10名、MC2名〕上層大気の力学的研究、プラズマに関する研究、極域異常現象の研究、電磁現象の医療応用。

電子回路学講座〔志水英二教授、松下賢二助手、重田和夫助手、4回生7名、MC4名、DC1名〕オプトエレクトロニクス、光コンピュータ、空間変調器、セラオートマタ、マイクロコンピュータとその応用。

電気通信工学講座〔山下一美教授、細川省一助教授、岡本次郎講師、浜裕光助手、4回生12名、MC3名、DC2名〕音声・画像情報の高能率符号化方式、音声分析・合成・認識、情報ネットワーク、視聴覚神経系における情報処理、パターン認識と理解、医用画像の計算機処理と自動診断への応用、データフローマシンと言語、人

工知能と通信処理。

電気計測工学講座〔安藤慶一教授、前川義治講師、青笹正夫講師、草間聡助手、4回生6名、MC2名〕薄膜EL素子の多色化と低電圧化、アモルファスシリコン薄膜の生成と応用、グロー放電重合薄膜によるプラスチック表面の改質、海洋環境計測。

電気機器学講座〔藤井知生教授、建部渉講師、渡辺博巳講師、森下昂助手、4回生7名、MC3名〕小形電気機器の特性改善、パワーエレクトロニクスの電気機器への応用、海洋汚染の調査研究。

情報工学講座〔奥本隆昭教授、藤原直賀人講師、4回生7名、MC2名〕学習認識システム、知識工学、並列処理アルゴリズム、ファジリアルゴリズム、発見的学習行動、データ通信における誤り制御方式、コンピュータネットワークに関する研究。(電気工学科主任教授)

## 応用化学科だより

太垣 和一郎



同窓会の皆様には益々ご健勝でご活躍のこととおよろこび申し上げます。さて教室だよりですが、まず教員の動きから御報告します。無機工業化学講座の們章助教授が8月1日付で徳島大学工学部へ教授として御栄転になりました。幸塚正児助教授が4月1日から米国へ一年間の海外出張を

されていますが、圓藤紀代司講師は出張を終えてすでに帰国され、三浦洋三助手も近く帰国予定です。その他短期の海外出張は昨年以上の回数で国際交流の活発なことと当学科教員の海外での知名度を反映しているのではないかと自賛しています。その中で少し変わったのを一つ紹介しますと大阪市立大学とソ連のレニングラード大学との間の学術交流協定に従って私(太垣)が一ヶ月(9月15日~10月14日)レニングラード大へ派遣されたことです。レニングラード大は元素の周期律で有名なメンデレーエフが教授をしていた大学で、その生化学教室で講演できたことは大変光栄でした。いままでソ連との国際交流は西欧とのそれに比し皆無に近く、今後一層の交流の必要性を痛感しました。

さて当学科は昨年と変わらず、無機工業化学講座(平井竹次教授、五百井正樹助手)、有機工業化学講座(太垣和一郎教授、幸塚正児助教授、玉垣誠三講師、荻野健治助手)、反応工学講座(原納淑郎教授、小郷良明助教授、矢野元威講師、大嶋寛助助手)、合成化学講座(木下雅悦教授、仲矢忠雄助教授、国枝紀夫講師、山内清助手、三浦洋三助手)、高分子化学講座(大津隆行教授、山田文一郎助教授、圓藤紀代司講師、松本章一助手、森薫輝技術員)、と大学院応用化学専攻の第六講座に相当する原子力基礎研

究所・放射線高分子部門(蘭頭健吉教授、権名助教教授、山口英昌助手)から構成されています。各講座ともますます研究と教育に熱が入ってきています。紛争以前のかつての熱気をとりのどしさらにレベルアップしたいものと願っています。来春は学生の定員増が予定されています。大学院生の数も増えてきました。どうか同窓会の皆様、当応用化学科に対して一層の御支援をお願いいたします。

最後になりましたが皆様の御健康と御発展をお祈りしております。(応用化学科主任教授)

## 主任からの近況

三輪 雅久

今年の関西は、これまでのところ台風も来ず、さして大雨も降らず、無事に過ぎた。学科主任も半年が過ぎたところである。



この6月、昭40学部卒の藤本敬之君が、長年の努力が実って建築

では久し振りに、博士の学位を受けたこと(建築ではニュース)、また市大建築学科の草分けのお一人である、元教授・現非常勤講師の中沢誠一郎先生が、この8月末に鬼籍に入られたこと、を除けば、学科の近況にこれぞといて、とくにかわりばえのする話題はなかった。大学も静かになった。

いつもながら、先輩ほか各方面のご支援があって、来春の卒業・修了見込み学生の就職事務も、去年より早めに運んだ。建築関係の業界は、若手の人手不足があって、その面からも来春新採用への期待がかけられているようで、一時ほどの就職難でなかったのは、まずは世話役の学科主任としても有り難いことであった。国際化、情報化時代にむけて、仕事はますます厳しくなることであろうが、今年の建築4回生とM2の諸君の、世の中に出での、活躍を祈る。そして、いつにかわらぬ先輩諸兄姉の暖かいご指導をお願いしたい。

ところで学科内では建築学演習レポートの取り纏めとか、4回生相手にぼつぼつ今年の卒業設計指導のスケジュールが始まる場所である。建築学教室も杉本町に移転してからもう20年近く、学科の1F、4F、5Fともどの室も実験室も手狭である。製図室、講義室に続いて、4Fの建築会議室も、床のピータイルをはがして、床仕上げを直してもらった。雨漏りの天井のシミも直って、いささか室内環境が向上したのが、やはりこの夏である。窓のそとでは、キャンパス内のケヤキも茂り、街の緑化という観点からみても学部の周辺は、訪問者が寝るほどになったが、住み着いた場合は、平和の使者かもしれないが、窓を汚すばかりで、困りものだ。

先頃、膜並びに架構関係の国際シンポジウムが大阪で

開かれ、日置教授や川村教授ほか構造関係のメンバーは、多忙であった。とりわけ、日置先生は応募論文の査読もあって、何ヶ月も、それに掛かり切りというほどの、忙しさであった。無事に終わった皆の感想の一つが、建築のみならず工学のおおきな流れのなかに日本もいる、日々がそのまま「国際」なのだ、という、実感であったそうである。内容があつてそして“国際マッタダ中”という時代に伍してゆけるか、建築の教育面、研究面においても、乗り越えるべき課題であろう。

ともあれ同窓生各位のご健勝を祈る。

(建築学科主任教授)

## 土木教室の近況



園田 恵一郎

本年も残り僅かとなりましたが、卒業生諸氏には益々御活躍のこととお慶び申し上げます。土木会報が年末に発行されますので、教員の移動ならびに研究状況をかいつまんで述べます。

昨年3月御退職の、三瀬先生、倉田先生ならびに堀川先生のお三方は、現在、大同工業大学教授、東洋建設(株)本店設計課長、大阪工業大学講師としてそれぞれ御活躍です。また、新採用の貫上・鬼頭両助手は、共通一次試験世代の初教員で当教室の新しい担い手として期待されています。

しかし、悲しいお知らせもせねばなりません。12月、西堀忠信助教授(後に教授に追贈)が逝去されました。誠に残念でなりません。御冥福をお祈り致します。

61年4月には、橋梁工学講座に阪野雅則助手が採用され、構造工学講座の小林治俊助手が講師に昇格されました。こうして土木教室のスタッフはほとんど若返っていき、来年3月に三笠正人先生の御定年を迎えれば、初代の先生方は全部去られ完全に2代目の時代に入ります。当然のこととはいえ一抹の寂しさも隠し切れません。

さて、教員の活動に関しては、相変わらず海外出張は多く、常時、誰かが外国に行っていると言っても過言でない状況です。また、小田一紀教授は本年3月から6月まで、ブラジル・サンパウロ大学で交換教授として向こうの土木工学科学生の研究・教育の指導に当たられました。研究面では、本多教授の環境工学を含め、レポートリーが広くなりました。また、研究成果に対しては、中井教授が「曲線プレート・ガーダーの終局強度に関する研究」で60年度土木学会田中賞を授賞され、三笠教授・高田助教授は「土質工学における遠心力模型実験の開発と応用」で61年度土質学会技術賞、さらに、三笠教授・望月講師は「宅地造成地の水浸による沈下の検討例」で61年度土と基礎読者賞を授賞されました。

最後に、学生の動向に触れておきます。最近の特徴としては、大学院に進学する学生が増えて来たこと、中国、台湾からの留学生を受け入れていること、学部には3名の女子学生(3回生2人、1回生1人)がいることなどをあげることが出来ます。就職に関しては、求人状況は今年も昨年とほぼ同じ状況ですが、相変わらず公務員希望者が多くなっています。魅力ある民間のPRの必要性を感じています。

(土木工学科主任教授)

## 昭和61年の応用物理学科

村井 昭



今年4月に「光物性工学講座」が誕生し、昇格した西村(仁)教授は、学生部A委員長を兼ねて忙殺されています。同時に森雄造助教授と石黒英治講師が誕生しました。他方、兼松教授が定年退官されて、私の講座名は「レーザー

工学及び電子物理工学」となりました。

9月末、鶴飼助教授が「非線型ボルツマン方程式の数学的研究」で大阪科学賞を受賞され御同慶の至りです。

兼松名誉教授は、枚方市の多田病院にて御療養中ですが、回復はもう一つはかばかしくありません。

10年前迄の卒業生諸君に理学部から出張して「物性論」の名講義をして戴いた柿木二郎名誉教授が、去る9月26日に心不全で亡くなりました。慈に慎んで哀悼の意を捧げる次第でございます。

また、大阪市の行政改革の一環で廃止になる原子力研究所の諸先生方の工学部への参加問題と、工学部多年の懸案の新専攻の開設問題とが重要になっておりますが、現在の所まだ五里霧中です。

今年初めからの急激な円高で、主にエレクトロニクス関係の製造部門に居られる卒業生の皆様には特に御心労の多い年であったと存じます。ハイテク・先端技術競争の中にある各メーカーは、こぞって息長く新製品ブームの続くエレクトロニクス分野に喰込もうとされており、資金力のある斜陽ががった産業を含めて、新材料・新技術をこなせる応用物理学科の卒業生には、約500社から1,000人を越す求人がありました。

来春卒業見込みの4回生の就職組は17名で、前期博士課程修了予定者も4名しか居らず、彼等には羽根の生えた様な状況ではありません。このように少人数のため、大方の諸先輩の切角のお引き立てや御要望にお応えできませんでしたが、彼等は諸先輩とは一皮違う新人類達でありまして、辛棒とか苦労を未だよく知りません。機会がありましたら、宜敷御鞭撻・御激励の程お願い致します。

(応用物理学科主任教授)

藤井先生、東野先生、三笠先生は来春、定年をお迎えになります。ここに、30数年間の思い出を特別にご寄稿願いました。

## 扇町学舎での研究の思い出

藤井 太一



大阪北の繁華街の中心である阪急梅田駅の東、歩いて約7分の処にあった扇町学舎は北学舎、南学舎と分室に別れていた。特に南学舎は元済美第三小学校の校舎で、私にとっては母校でもあり印象に残っている。

南学舎が理学系、北学舎と分室が工学系に落着いたのは、昭和24年に理工学部が発足してから何年かたった後であったが、私が奉職したのは、昭和26年11月で居所は南学舎、北学舎、分室と転々と移動し、ようやく北学舎1階玄関に入った処の部屋に落着いた。

北学舎での研究は、吉本源之助教授の指導の下に作業工具の研究を行い、ヤスリの切れ味の耐久性、ドライバー、ハクソーフレーム、ベンチの強度などを調べた。試験装置は殆ど手造りで実験の能率は悪かったが、それなりに楽しさもあった。

昭和29年頃から風洞実験装置の設置を計画、設計を何人かで分担して1年以上かかってようやく完成を見た。此の装置は木製、環流型で吹出し口は30cm×30cm、最大風速は30m/sで各種の実験に活用され、現在は杉本学舎E棟東端の風洞実験室に移設されている。

昭和34年には理工分離の計画が進み理学部、工学部に分け現在の体制になったが、工学部になって最も記憶に残っているのは工学部重点研究施設計画の実施で疲労試験機の購入と、それを収容する建物の建設を北学舎東側の空地に行ったことである。試験機は西ドイツ製シェンクPHQD型試験機で、当時日本には来ていなかった新機種で3ton±3tonの負荷能力をもち高速、低速両試験が可能で、曲げ、振り、高温試験のための附属装置を備えた万能形の試験機であった。此の装置の設置に当っては卒業生の皆さんや関連会社よりの援助を仰いだ。此の設備の設置により、研究活動は一段と促進され、高周波焼入れ鋼の疲労、鋼棒の疲労と超音波減衰との関係の研究、そして現在まで続いている強化プラスチックの疲労の研究を行うことが出来た。此の施設は現在杉本学舎に移築され工学部E棟の西側にあり現在も活動中である。

数年前、旧北学舎附近に行く機会があり、懐旧の思いをかきたててくれるものと期待したが、北学舎は取こわされて後かたもなくなっており、北野病院前の景観がすっかり変っているのに驚いた。時の経過の早さを改めて痛感させられた次第である。(機械工学科・教授)

## 大阪市大生活33年

東野 一郎



大阪市立大学生活も、いよいよ後数ヶ月を残すばかりとなった。思えば長い道のりでもあった。昭和28年4月機械工学科の大東俊一教授の研究室の助手として採用して頂いて以来、ずっと現在までお世話になっている。昭和21年秋、

大学を卒業してすぐ大阪大学理学部、元大阪市立大学学長渡瀬謙先生の研究室で7年間お世話になり、宇宙線の研究に従事していたが、内燃機関の研究に転向したのである。宇宙線の実験で覚えたエレクトロニクスをエンジン計測に応用する形となった。当時工学部は理工学部と称し、新しい形の工学部を志向し、小竹無二雄学部長のもと、全国から新進気鋭の若手の学者が集まり、活気が満ちあふれていた。しかし校舎は、小学校を改造したもので、今の学舎とは比較にならないぼろであった。私の居住した建物は、分室と呼ばれる、元小学校の用品倉庫の焼けビルを改造したもので、今から思えば人間の住めるところではなかったと思われるものであった。その後、昭和39年に今の学舎に移転するまでそこにいた。私は、今でもその時代を懲役11年と言っているくらいである。しかし、そのころの方がよく研究もできたし、学生諸君も朝早くから夜は終電車まで実験に精出していたものであった。それに比べると、昨今は、環境は素晴らしくよくなったのに、朝は遅く、夜は早くなり、活力は薄れてきたように思われる。その様に環境は頗る悪かったが、実験研究は順調に進行しているとき、昭和37年4月、突然大東先生が、岡山大学に転ぜられ、私はその後任の教授に任ぜられた。教授会の一員となり雑用が急増し、そして4年たったとき、これまた突然、思いも掛けなかった、「学生部長」という大役が私に降り掛かってきたのである。勿論断れば済むことだったのかも知れないが、断われなかったのが私の運命であったのであろう。昭和41年5月より43年4月まで丸2年間相勤めた。これは私の運命を変える大きな出来事であり、私の人生観を変え、また管理職なるものの試練を与えてくれたものでもあった。このことについて記すなら、1冊の本にもなるかもしれないような連続であった。学生部長を終えて1年経ったとき、また大事件が突発した。全国を襲った、いわゆる「学園紛争」である。昭和44年4月、工学部は学部長選挙が出来ず、私は、「工学部長事務取扱」に任ぜられ、渡瀬学長を補佐し紛争の処理に当たることとなる。そのため遂に体調を壊し6ヶ月でダウン入院の浮き目に逢った。そのあとで、いわゆる「3.16事件」が起こり、工学部のみが学園紛争を続け、5年後になって始めて平常に戻るが、学部の中での人間関係は大きく崩れ、学園

の上でも、時すでにおそし、他大学におおきく水をあげられ、今日の地盤沈下を導いてしまったことはかえすがえすも残念である。当時、対応がまずかったものの一人として大変申し訳ないと思っている。人生の働き盛りを、その様なことで潰してしまい、学問上では、気持ちの半分も無し得なかったことについては大きな悔いも残るが、大学の管理運営の面では、かなりの役務を与えられ、且つ果たしてきたという点では悔いはなかったと思っているのは単なる自己満足であろうか。そうこうする内に、時の過ぎるのは早いもので、昭和59年還暦を迎え、卒業生の皆さんにその祝福を受けた半年後、昭和60年3月18日、突然脳梗塞に襲われ、右半身麻痺、言語障害を起こし、一巻の終わりかと思った。しかし、幸いなるかな、一ヶ月半の入院で殆ど全快し、後は人生人事を尽くして天命を待つとも言うべき、一種の悟りの境地に達し得たと言えはやや大げさではあるが、波乱に満ちた大阪市立大学の生活に名残が尽きない思い出で一杯である。

(機械工学科教授)

## 定年退職を前にして

三笠 正人



全く月日の経つのは早いものです。昭和27年に岡部二郎先生のお誘いで九大から移ってきて以来、大阪市立大学で過した35年間は、私の人生で最も長い、最も充実した期間と言えますが、世の中の動きも、また私自身の生活もあまりにめまぐるしかったために、あっという間に過ぎたような気がします。玉手箱をあけておのれの白髪に気付いた浦島太郎の心境です。

はじめの扇町の仮学舎時代は、実験室は焼け倉庫のいわゆる分室の2階で、床も壁もぼろぼろで、壁のひび割れから街の灯りがチラチラ覗けるといった環境でしたが、森田紀元先生の陣頭指揮の下、能城、小川両君の率いる一隊の男女アルバイトや学生達と一緒に、現場から持ちこまれる土や調査データを相手に、戦後の大阪の復興の一翼を担う意気込みで若さにまかせて頑張りました。それ以来35年、私の土質工学はついにアカデミックなスタイルに取束することなく、現場の土を追って、あるいは追われて、なっば服的なまま過しましたが、この立場に立つと格好だけつけた論文の本質的な欠点が不思議にハッキリ見えてくるのです。工学とはもともと象牙の塔の中のものではないというのが私の体験的結論です。私の職場が格式の高い京都ではなく、本音の通じる商人と工員の町大阪にあったことは私の学問にとって大きなプラスであったと思います。大阪市大自体も言いたいことの言えるフンイキで私にはピッタリでした。(言いたいこ

とを言い過ぎてご不快の向きもあったことと思います。お許し下さい。)

土質工学は土の種類のも種多様なこと、さらにひとつの土をとっても鋼、コンクリート、プラスチックなどの人工材料と異なり、状態によってその性質が極端に変化すること(たとえば軟らかい粘土を圧密すると強度は何千倍にも増え、圧縮性、透水性は何千分の一にも減るなど)などのため実験も難しく、研究上の選択枝が多すぎてなかなか学説が収束しないうらみがあります。そのため私もいろいろ勉強しましたが結論に達し得ない問題も多く、また結論を得ても広く学界で認めて頂けないものもあり、多少の欲求不満は残ったままですが、去年から始めた反S I単位の運動と併せて、これからも頑張っ challenge を続けていきたいと思っています。

10月に高田直俊、西垣好彦、望月秋利の3君、11月に木下哲生、北村章、山田孝治、東田淳の4君の学位申請が受理され、順調にいけば9年前の原田次夫君と合せて8人の工学博士が私の研究室から誕生することになります。私の教え子たちが分担して私の大阪市立大学卒業論文を書いてくれたような気がして嬉しい限りです。教え子達の活躍は教育者の生き甲斐であり、定年までにこの喜びを味い得る最終段階は残っていますが——ことはまことに幸いであります。

長い大阪市大生活にはいろいろ波乱がありましたが、その最大のものは理工分離と大学紛争でした。特に後者は青天のへきれきで、何人かの方が寿命を縮める結果となり、また研究・教育活動の大きな停滞を来しました。大阪市大百年史にはこれらの出来事を客観的に記述すべくたいへん苦勞致しましたが、これを読み返しましても、平和に勉強に専念できるという現在の“あたりまえ”の状況がいかに貴重で、大事に守っていかねばならないものか、つくづく思いしらされます。大阪市立大学工学部の構成員の皆様が心一つにして、平和裡にますますご発展になりますよう、切に祈念する次第です。長い間の御交誼、本当に有難うございました。第2の勤めも大阪にきまりましたので、今後共よろしくご交誼のほどお願いします。(土木工学科教授)



扇町学舎時代の北学舎と分室(市大百年史より)

## 扇町学舎雑感

日枝 仁郎



大阪駅より東へ徒歩約15分、水道局の手前、そこに我々の学舎があった。元小学校の薄汚いこの建物は、道路に面し、階段を5～6段も上ると玄関で、一見不釣合と思える「大阪市立大学理工学部」の看板が掛っていた。玄関をくぐると廊下が左右に走り、その向うは中庭で所狭しと実験設備機器で占められていた。この設備は確か大阪湾の相似模型池で、毎日造波装置で「バサー」、「バサー」と実験を繰返していた。一方この中庭を取囲むように教室と研究室群があり、狭い研究室は雑然としこれ又実験用機材等で一杯で足の踏場もない有様であった。

狭くて設備には恵まれなかったが然し学内には何か熱気に近いアクティブなもの、建物全体がアカデミックに感じられ、気にもならなかった。近年になって杉本町のキャンパスを訪れたが、今昔の感を禁じ得なかった。

それにつけても、不勉強だった私が現在迄、何かと役にたったのは、応用的学問よりむしろ基礎的科目によるものが多い。当時の理工学部長、小竹無二雄先生の教養課程の2年間、必修の基礎学科重視の御方針に、今さら乍ら感じ入った次第である。

(機械・昭和29年卒・㈱タクマ・環境設備本部)

## 最近の雑感

立石 浩二



「水戸黄門」というTVの人気番組がある。若い人もよく見ているらしい。ところが新人類の見方はご老人達とちがって、勸善懲惡で悪が滅ぼされてスカッとするという見方はなくて、印籠をどう出すかというその出し方を見ている訳で、かっこよく出すと「なかなかよろし」という事らしい。つまり番組の作り手側の意向が、受け手側と違う見方をしていたという例である。

技術の世界でも、必要は発明の母と言われる様にソフトあつてのハードではあるが、最近のニューメディアといわれる情報化社会では、どうも発明のみ先行して必要はなし、といった受け側不在の感がなくもない。

そこで工学部学術交流センターだが、地方の都市であたかも文化を前面にちらつかせる様な文化会館、市民ホール的多目的ホールの様にはならないで欲しい。多目的ホールでは個性的な文化は育たない。何が必要かを考え、何でも交流センターではなく一つの目的を決めた専用センターになってもらいたいものだと思います。

(電気・昭和29年卒・朝日放送㈱テレビ制作技術局)

## これからの技術

今井 淳雄

21世紀まで、あと15年、21世紀の社会が、どの様なものになるか、考える前に残された15年が気になる。技術革新の激しい今日、勢い盛んな技術が衰退し、意外なものが日の目を見る激動の波は、充分予想される。将来を予測するため過去15年を振り返ると、昭和46年頃は30年後半から続いた高度成長と所得倍増の反動期の幕開けであった。上昇をつづける物価に2度の石油危機、総需要抑制による低成長の冬の時代への突入であった。省力、省エネ、省資源を求められ、低迷する国内需要から海外へ輸出競争の時期であったが、今60年代は国際競争から国際協調へと転換を求められている。かくの如く15年の歳月は、社会も、制度も、生活様式までも変わると考えねばならない。この不透明の時代に、はっきり言えることは、①技術革新、②国際化社会、③高齢化社会で、以上3つの波が来る時代を迎え、21世紀に向けて進まねばならない。今までの様に追いつき追い越す、先進国は前にはいないと思う。(土木・昭和29年卒・神戸市土木局)

## 母校の思い出

田岡 二郎



昭和25年に、設立されて2年目の、理工学部に入りました。当時の扇町の校舎は、これが大学かと思う位の見窄らしい建屋でしたが、小竹先生が選りすぐられた新進気鋭の諸先生が張りきっておられ、新生、市大理工学部の名声はとみに、高まっておりました。先生は当学部はドイツ流に基礎学問を徹底して教育する事が特徴であると云われ、理工学部の分離は必要とせず、という信念を述べられた事を記憶しています。憧れの小竹研究室に入れて頂きましたが、どうした事か、学問に縁の無い連中が配され、学窓を出てから先生にお会いするたびに、「君らのグループは天満のパチンコ屋で学資を稼いだ…」と、からかわれました。よくも卒業させて頂いたものと今なお、感謝の念で一杯であります。かくして昭和29年の卒業式で、私は社会に出てもう一度勉強し直そうと心に決め、先生のお言葉「運、鈍、根」を大学生活で得た唯一の財産として巣立ちました。(応化・昭和29年卒・田岡化学工業㈱)

クラス会

小西 陽雄



早いもので、卒業以来27年が経過し、この間工学部もいろいろな思い出のあるオンボロの扇町学舎から杉本学舎へと移りすでに20年、関係者の努力により学舎の整備とともに、

技術革新の時代に対応してその内容も充実し、益々の発展を心づよく思っております。

同窓生の方々も、それぞれの分野でご活躍、ご同慶の至りであります。

さて、わが同窓の士27名も各方面に進路をとり、社会の荒波をのりこえがばっているうちに、いつの間にか実年と呼ばれる年代となりました。

20年目には……、25年目には……と思ひながら実現しなかったクラス会を、久しぶりに開催しようという声が一番強くなっており、先日の準備会には多数の参加があり、長い間離れていても同窓生という絆は、やはり固く結ばれているのだと確信しました。これからも同窓会・大学の関係をより大切にしていきたいが、とりあえず近々にクラス会の開催をと思っております。

(電気・昭和34年卒、大阪市交通局)

転 機

不可三 晃



34年の化学卒業生の同窓会として三志会を組織し、定期的な会合を持って来た。当時は卒業年次をもじった名前をつけて、社会に羽ばたくことを夢みた三つの志を決めたと思う

のだが今ではそれを定かに思い出せない。34年頃と言えば、就職もまだ厳しく狭い門であったが一応大半がメーカーに落着いていた。その後所得倍増政策をはじめ産業界にもブームが訪づれ、数年間のうちにかなりの同級生が自分に合った新しい会社を求め転職していった。私もその一人であったが、我々にとって自分の人生のやりがいを見出し転職となった最初であったと思う。

時は今、メーカーにとって厳しい時代となっており発想の転換が求められ、また産業構造の変化が進みつつある。幾多の困難を克服して成功物語を創りだした同級生も50才となり、年令的にも環境のうえからも、また再び転職が始まろうとしている。

これからの人生を見すえた三つの志を新しく設定して、同級生共ども頑張りたいものだと思う。

(応化・昭和34年卒・三菱電機株)

クラス会報告

向阪 保雄

昭和34年機械工学科卒業生の様子を記します。

私達の年度は卒業時31名でしたが、卒業後悲しいことに、辛君、大野君、吉田君の3人が若くして亡くなりました。しかしあとの同窓生は各所で頑張っております。

私達同窓生の中にはまとめ役とも云える、現大林組の寺奥君の存在のおかげで、学生時代からよくまとまっており、同窓会も割合よく開いている方だと思ひます。学生時代の先生方をお招きしての泊りがけの同窓会も2度開きました。白髪混りの年代となりましたが、会えば学生当時と何ら変らない雰囲気に戻り、他愛ない話にまた情報交換に花が咲きます。出席率も海外にいる人を除けば80%は越えます。現在3年に一度の割合で同窓会を開くことにしていますが、忙しい人も多く、今後しばらくは出席率が低下するかも知れません。40周年記念事業の工学部学術交流センターが完成すれば、一度同窓会の前座をそこでもちたいと思ひます。何しろ私達はおんぼろの扇町学舎の出身なものですから。

最後に、母校と同窓会の益々の発展を祈ります。

(機械・昭和34年卒・大阪府立大学)

特許事務所からの短信

西田 新



シャープ株式会社を退職し特許事務所を開設してから13年目になりました。

弁理士の仕事は、この発明が特許されるか？この商標は他人の商標権を侵害しているか？等の鑑定業務、日本および外国での権利取得業務、工業所有権の帰属、権利侵害等の争いについて弁護士と協力して行う訴記業務などがありますが、このほか開発研究の成果の保護、権利侵害事件の予防など中小企業に対するコンサルタント業務は私の好きな仕事の一つです。

最近の特許制度の動向は、外国特許権取得のルートが従来のパリ条約ルートのほか、国際協力条約（PCT）欧州特許規約（EPC）等と多様化し、更に国内においても、過去1年間の自己の出願を一つに纏め直す国内優先権制度の導入などがあります。今後は世界的分業化が進むなかで中小企業からの外国出願が増えたと共に、特許権をバネに躍進するベンチャー企業も増加するでしょう。(応物・昭和34年卒・西田新特許事務所)



## 同 期 会

木本 英爾

昭和39年に本学工学部建築学科を卒業した私共の同期生は20人である。今日の卒業生の数に比して随分少なく、その分だけまとまりもあった。建設業、設計事務所、官庁、大学等に勤務し、転勤も多いことから一定はしないが、約半数が関西に、残り半数が関東、中部、四国に居を定めて活躍している。

約2年前、卒業20年を記念して思い出多い大阪で同期会を開催した折には、19人が集まった。卒業時の恩師で当日出席して下さった15人の先生方を囲んで、昔話や現在の仕事のことなど話に華が咲き、本当に楽しい一時を過ごすことが出来た。

二次会は一転して同期生ばかりで飲んだが、杉本や扇町時代の悪童に戻って深夜の別れが惜しまれた。

この会が契機となって、建築では20年目の卒業生が当時の先生方を囲んで開く同期会が定着しつつあることは喜ばしいことである。

(建築・昭和39年卒・大阪市立大学工学部建築学科)

### 開発研究に16年従事して



室野 義隆

昭和39年に応用物理学科、41年に電気工学科(修士)を卒業させていただき、総合エレクトロニクス企業の研究開発担当職に16年従事し、何がしかの社会への貢献と自己の存在を感じ得た原因は母校にありと思ひ、御指導下さった先生方や職員の方々に大変感謝しております。

さてエレクトロニクス企業でプリンティング機構の研究やOA機器の開発および商品設計に携わってきた私の経験で感じたことを述べてみます。但し現在は他業種で自営奮闘中ですが……。①まず大学時代に力を入れるべき事は、実分野でよく利用される数学論理を十分に把握し実際の現象を説明できる数理解析能力を身につけること。これは各種の講座の中で利用頻度の高い分野(例えば振動理論、電子回路、統計学、計算機プログラミング)に集中して実力を高めること。②研究室には固有の雰囲気があるので、その「良いとこ取り」を心がけ、特に厳しい批評する先輩や先生の助言を大切にすること。③学習人間と遊び人間(マージャン、ゴルフ等の対人技術)のマルチをめざすこと。

次に企業の研究員として心がけなければならないことは、④与えられた研究開発テーマを、同業他社よりも早く質的にも高いものに完成させる絶対の使命感と自信を持つこと。しかし一般には研究終期で企業の考えている方向(商品形態、価格、社会のニーズ)と一致しなくなることが多いが一つや二つの成果が没になっても気を落

すことなく新規テーマにチャレンジする勇気が必要である。⑤特許調査を十分に行ない、先人の技術に抵触しない固有の技術(かつ会社が飯が食えるもの)を確立すること。技術の新規性だけに目をうばわれず、商品として社会のニーズに合うかどうかの判断が大切である。たとえ使用技術が高度であっても、売れない商品は企画開発担当員の共同責任であると考えよ。ある社で売れない商品が他社でヒットするのは世に出すタイミング、販売方法、企業イメージによるもので、ここは生死共にする運命共同体(会社)として割り切れ。

以上後輩諸氏に御参考として申し上げます。最後に研究職のみならず、若い内にあらゆる職種を経験し、飯の種になる分野で、後半の人生、深入りするのが、得策と思います。(応物・昭和39年卒・自営)

### 山登りと研究、そして土木工学

角野 昇八



近頃、研究や学習は登山に例えられるのではないかと思うことが時々ある。裾野はなだらかで登りやすく、頂上に近付くほど険しい。先人の切り開いた登山道を登る場合は「学習」であり、道無きところを草木を分けつつ登るのが「研究」ではなかろうか。時に、横になだらかな斜面があるにもかかわらず、それに気付かず急峻な経路を選んでしまったりする。しかし、登山道の無い山腹をせいぜいガイドを頼りに頂上を極めることができれば、誰もがまだ味わったことのない頂上からの眺望を醍醐味として味わうことができる。このようにして頂上に立ったとき、往々にして自分の登ったのとは全く別の経路に既に道が拓けているのがみえることがある。即ち、土木工学の中の山のつもりが、実はその山は例えば電磁気学の山でもあり、頂上で両分野が繋がっていたりする。昨今、土木工学は今流行の先端技術とは無関係では?という話も聞か、上記の様なことを考えるとき、決してそうではないという気もする。

(土木・昭和44年卒・大阪市立大学工学部土木工学科)

### 会費払込みのお願い!!

当会は同窓各位の終身会費によって運営されています。何かとご出費も多いことは存じますが、まだ未払いの方は早急にお払込み下さるようお願い申し上げます。なお、ご不明の点は事務局へお問い合わせ下さい。

## クラス会について

大倉 良司

卒業して早や17年。昨年の8月に、40年入学組として初めてのクラス会を開いた。入学としたのは、各人の自由意志で卒業年次が異っているからである。その席上、クラス会を持ちたいと思うのは、卒業後15～20年経ってからだろうかという話が出た。会って懐しさを覚える、時間に余裕のあるポストにいる等が理由だろうか。前向きな話題、後向きな話題、何れにしても利害関係が無いという意味で、本音で話せて楽しかった。容貌変化・思考変化、人は変わるもの、それが面白い。本年も8月にクラス会が開かれた(写真参照)。所用で私は参加出来なかったが……。来年以降も皆様のご参加を!



(建築・昭和44年卒・大阪市立大工学部建築学科)

## 大学に寄せる期待

三木 健一

大学には学部・研究生・大学院と足掛け7年の永きに渡りお世話になりました。御厄介をおかけした諸先生方にはこの機会を借りまして改めてお礼申し上げます。

製造業に携わる現在、昨今の円高・構造不況に対し各企業は新規事業あるいは業際に活路を見出そうと必死に努力を続けています。技術者としての素養はもちろん、多くのスペシャリストをまとめプロジェクトを推進するゼネラリストとしての能力が一層重視されるようになりました。日本では実務を通してこれらの能力を開発するオンザジョブ志向が強く、分業化の進んだ米国では心理学・行動学に基づく学問として、大学は社会人にも広く門戸を開いており、数多くの実務経験者が大学院等で勉強後レベルアップして企業に戻って行くのが一般的です。メカトロニクス・バイオケミカル等の工学的学際分野はもとより、工学と社会・経済学を一体とし社会現象を点ではなくフローとして捉える生涯教育の場が市大に設けられることを切望してやみません。

(機械・昭和49年卒・ダイキン工業㈱)

## 後生雑感

西田 隆仁



卒業して早十年。いまだ新人気分でしたが、気がつくと周りに後輩が入社している。

巷では、彼らのことを新人類などと言っているが、むしろ、彼らから教わることの方が多い。先日、会社で、少々放言が過ぎたと思っていると、I君が来て、「言えばいいと言うものでもないでしょう。やりたいことが出来る体制づくりを心掛けるべきですよ。」と言う。H君にいたっては、「性格ですね。」と呆れ果てた様子。

なるほど、社会人たるものかくあるべし、と自戒させられるが、袴つけて長続きするものでなし、腹ふくるも癪となれば、天真爛漫も一つの手と思ひ直す。

しかし、ああ言われて気になるのも人情。せめて、こは一つ、寸鉄人を殺さぬよう、発言はオブラートに包んで、と反省してはみるが、それも束の間。

今度は口の悪いクラスメートに、「後輩はりっぱな反面教師をもったなあ…」と言われる始末。なるほど、後生畏るべし。(応化・昭和49年卒・日本バルカー工業㈱)

## 財団法人に勤めて

国田 幸雄



私は、この6月から(財)あまがさき未来協会という公益法人に勤務している。この協会は、尼崎市が市政70周年を機に、都市の再生、まちづくりの具体的方策等を研究・調査し、計画の立案等を行う機関として、本年4月に発足したものである。

私と尼崎市とのつき合いは、大学院及び設計事務所勤務時代を通じて6年程になる。それは専門分野である建築学に関する研究・調査での関わりであった。しかし、この度、協会に勤務して、専門以外の他分野の広範な知識やそれらを総合化する判断力の必要性をも痛感している。

今後は、自分自身の精進も必要と思うが、加えて多くの人々の助力をお願いし、協会を発展させていきたいと思う。そのためにも、同窓の人達はもちろん、諸先輩、後輩の方々との連絡、連携をより一層密にしていきたいと思うし、そのことで私で役立つことがあれば積極的に参加していこうと考えている。

(建築・昭和49年卒・(財)あまがさき未来協会)

## 技術とは何なのか

谷 俊寛



私は工学部土木工学科を卒業して12年あまり、主に橋梁の設計に携わってきました。「だれがタコマを墜としたか」(川田忠樹著)を参考書として、私が日頃抱いています「技術と

は何なのか」についてその一部を述べたいと思います。この著書では、旧タコマ・ナロウズ橋(1940年完成の吊橋)の風速19m程度の風による落橋事故について、生の技術者を通して原因が究明される過程が記述されており、また、技術の革新(経済性と新理論の追求)と安全性(自然からの警鐘)の対峙のなかで、人類がどのように吊橋を理解するに至ったかが歴史的に一望できるものとなっている。前述の二律背反性と事故の歴史が、技術をより高度なものとしているのは、殆んどどの工学分野に共通するものと思われます。我々技術者は、細分化された、より安全性の高い技術の一部(マイクロ)を司っている訳ですが、同時に次の全体像(マクロ)を忘れてはいけません。①人類が進んだ歴史(特に事故の歴史)②自然からの警鐘(自然は姿を変えてやってくる)(土木・昭和49年卒・高田機工棟)

## 同窓会の状況報告

松下 行雄



大学を卒業してはや7年という歳月が流れてしまったとは。この原稿を依頼されて、まず第一に感じたことです。社会人として7年も経つと、そろそろ責任のある立場で仕事をし

なければならなくなって毎日忙しく、大学時代の同級生と連絡をとり合う機会が減ってくるし、各地で働いているので一同に会するのも難しくなってきます。けれども私たちは、卒業以来年末には同窓会を開いて大学時代の思い出話や意見交換、情報交換を行っています。職種異なる人と接する機会の少ない者にとっては、非常に有意義な会らしく、毎年この日をみんな楽しみにしているようです。この秋には、同窓のゴルフコンペも開催する予定で、また違った意味でのつながりを作りたいと思っています。ただ残念なのは、電気工学科同窓会や工学部同窓会への広がり欠けていることで、今後、私たちが積極的に参加して、もっと同窓会のつながりを強いのによって母校を盛りたてていけたらと思います。(電気・昭和54年卒・近畿日本鉄道棟)

## プラントからダムへの設計へ

富岡 健一



昨年12月より出向という形で東京から大阪へ戻ってきました。業務もメーカーからコンサルタントに変わり、社会人5年目に大きな転換を経験しました。

同じ土木工学であっても、在京当時はLNGタンクやプラントの基礎が設計対象であり、機械に付随した土木というものでしたが、現在はダムが対象でありまさに土木 only の仕事です。

技術的にはこれまで土質力学が大きな比重を占めておりましたが、ダムということで、岩盤評価が重要となります。ダム計画地点のボーリングコア及び横杭、そして現地調査といった地質学的な知識が必要です。もちろん地質の専門屋はいるのですが、土木屋としても黙ってデータをもらうだけではだめで、地学書を引っぱり出して零からの出発をしております。

在阪しているにもかかわらず、大学へ挨拶も行っておりません。ようやく落ち着いてきたこともあり、同窓会へ積極的に参加させて頂きたいと思っています。

(土木・昭和54年卒・石川島播磨重工業棟より棟新日本技術コンサルタントへ出向)

## 同窓会をやりませんか

伊勢 博幸



もう早いもので、卒業して7年がたち、8年目にはいりました。みなさん、それぞれの場で活躍されていることと思います。

ところで、我々27期生は一度も同窓会をやったことがなかったですね。

そこで、一度、同窓会をやりたいと思っています。

詳しいことが決まりしだい連絡させていただきます。みなさんお忙しいでしょうが、ご協力をお願いします。(建築・昭和54年卒・棟オオバ)

### 来年は会員名簿を発行します!!

来年11月末には第6号名簿を発行する予定です。少しでも新しく、より正確な内容にするため、ご住所やご勤務先の変更は、かならず当会事務局へご一報下さい。

なお、連絡先不明のため、今だに同窓会報をお受取りになってない方もあります。そのような同窓生にお会いの折は、是非事務局へご連絡下さるようお願いいたします。

## 社会人一年生

仲藪 佳典



学部を卒業して早くも2年と半年が過ぎました。卒業後2年間は大学院で過ごし、今春から久保田鉄工で働いております。学部での1年間、院生としての2年間と研究室で過ごした3年間は私にとって貴重な時間であったと思います。1日のうち半日近くを研究室で過ごす日々が続いたのですから数々の思い出があります。研究室の先生からも公私共にいろいろなことを学びました。私にとっては研究生生活よりも研究室の先生との出会い、研究室にいる学生との出会いが貴重であったのかもしれない。

さて、そういった学生生活を終え、企業で働くことになったのですが、配属された部署はCAD開発チームでした。私が担当しているのは、CADとプロッターとの接続部のプログラム開発です。プログラム作成は苦手な方なので、毎日苦労しております。研究室のみなさんもこれからが忙しい時期だと思います。お互い頑張りましょう。

(機械・昭和59年卒・久保田鉄工)

## 社会人1年生として思う事

山脇 武志



6年間お世話になった母校を卒業し、ほぼ半年がたとうとしています。社会人1年生として、今までとは違った環境で生活し、今思うことを2点あげます。

まず、第一に、私の従事致しております建設業というものは、施主から職人まで幅広い階層と接しつつ仕事を進めるものであり、自ずから、考え方や学歴の違った人々と出会うことが多いように思います。こういう状況におかれますと、大学という同質の世界を越えて、幅広い人間関係を築き、見識を広める必要があると痛感しています。

第二に、大学で学んだことが、考えていた以上に社会で役立ち、また必要とされていると感じます。とは、言っても私の少ない経験では、細かな知識が役立つのではなく、物事の考え方や論理の進め方といった漠然としたものが役立っているように思います。

論旨のはっきりしない文章を書いてしまいましたが、皆様方の御活躍を祈りつつ筆を置きます。

(建築・昭和59年卒・㈱奥村組)

## 学生時代への追憶

驚田 伸也



学生証を持たなくなって半年が経ちましたが、夢や希望、そして自由さえもがまわりを見渡しさえすれば幾らでも転っている様に思えたり、少し背伸びをすれば未来が簡単に見通せる様な気がしていた学生時代はやはり輝いて見えるもので、例えば、先輩や友人の詰ったアルバムを見つめる度に泣きたい程の懐しさを覚えたり、あるいは単に同じことの繰り返しでもかまわないからもう一度自分と云うものを演じてみたい等と願ったりしてしまいます。確かにいろんな事があって、そしてそれは必ずしも楽しいことばかりではありませんでしたが、それでも自分にもし青春と呼べるものがあつたならそれは学生時代そのものだったと思えるからこそ、こんなふうに時折り振り返ってしまうのかもしれない。六年と云う時間の重さとその中の想い出の数、そして先輩や友人達と共に過ごした学生時代の記憶、そう云ったものがきっと私を支えてくれて、たとえどんな辛い時にでも立ち上る勇気を与えてくれるだろうと信じています。

(電気・昭和59年卒・関西電力㈱)

## 大学での私の研究

半沢 弘昌



私は、大学での生活も学部、大学院を通して今年で7年目である。同期生の多くは、学部を卒業、又は修士を修了後、企業の工場、研究所に勤めている。中には、既に結婚をしている人もいる。

現在、私は、大倉教授の下で後期博士課程に在籍し、F中心の研究を行っている。今日、半導体などハイテク産業としてもはやされている中で、改めて基盤技術の研究の必要性が認識されている。その一端でも学べれば良いものと思い、構造の単純な、だが本当は大変複雑なF中心の研究を行っている。しかし、事に臨んでみると今更のように勉強不足が痛感される。学部の在学中に、もっとしっかりと基礎知識を身に付けるように努力すべきであったと反省している。

毎年のお盆休み、忘年会には同期生が顔を合わせて集まるのが楽しみである。お互いに、忙しい生活ではあるが、帰阪のおりには大学の研究室へ遊びに来て欲しい。

(応物・昭和59年卒・市大大学院後博)

## 社会人1年生

尾川 仁俊

「光陰矢のごとし」とはよくいったもので、社会人になってから、早6ヶ月、まさに字のごとく毎日が矢のように過ぎ去っていった。

4月に人事の人に連れられて、同期生2人といっしょに今の配属先であるプラント輸出本部土建計画部へ行ったことが昨日のように思い出される。その時は、不安でいっぱいだったが、今はもう周りの雰囲気にも慣れ、不安も消えさるぐらい毎日があわただしく過ぎていく。職場では、主にプラントの土建部門の設計に携わっているが、特に英語力の要求される部署で、もともと英語力の貧弱な自分には、英作文1つ作るのに人の何倍もの時間がかかり、毎日、苦闘の連続である。

しかし、まだ、社会人として6ヶ月が過ぎただけで、これから山あり谷ありの人生が続くと思う。が、どんな時でも自分の足元をしっかりと踏みしめ、毎日を大切にしたい。

(土木・昭和59年卒・日立造船㈱)

## 関東支部の発展を願って

片井 振武

昨年10月19日、新宿野村ビルに113名もの関東在住工学部同窓生が結集し、盛大な初会合が開催できてから早や一年が過ぎた。この間、橋本雅之(電気・36年卒)氏を代表に選出し、組織構成を検討してきた。第2回目の関東支部同窓会は来る11月22日に日立金属高輪和彊館で催す予定をしており、テレビ、舞台、執筆等で多彩な活躍

をしておられる金田龍之介(機械・24年卒)氏の講演や各科同窓会の近況報告を行うべく準備中である。

私見で恐縮ですが、想えば昨年の初会合は、我々関東在住同窓生にとって、言うなれば明治維新の薩長連合・公武合体のような出来事であったと思う。幕末の志士よろしく、関東の各科同窓会の合同統一を願う有志各位の情熱が、各科同窓会の合体にとどまらず、歴史ある有恒会との交流の掛け橋にもなり想像を越える広がりのある親交を芽生えさせたと思う。有志の打合せ会では、酒を酌み交すうちに、自分達が熱っぽく論議していることと幕末の志士達の談論風発の会合とが重なって、銘々の役割を幕末に照らしてはてしなく語り合うこともあった。志はあっても、多忙で打合せ会に出席出来なかった同窓もあつたわけですが、各科バラバラの糸を統合して太い一本の紐にしていくために、我々有志にも幕末の志士に負けぬ位の熱気溢れるムードとエネルギーがあつたことを申し上げたくて、差し障りのあることを恐れながら敢えて記させていただいた次第です。

同窓会に対する思いは一人一人まちまちでしょうが、私は、同窓会特有の意義と価値を得難いものと思っており、こまめに出席したいと思っている。出席回数が多い程より多くの顔なじみができ、得も言われぬ親しさや楽しさ生まれてくる。専攻学科や種々のグループ単位での会合もどんどん重ねていくべきだと思っている。

いつの日か、大阪と東京の真中である浜松あたりで、工学部同窓会の全国規模の会合が盛大に開催出来るようになることを望んでいます。

今後とも、関係各位・会員各位のご支援とご協力を心からお願い申し上げます。

(機械・昭和22年卒・山田工業㈱開発担当部長)

### 定例評議員会のご案内

ご承知のごとく、当会では2年毎に定例評議員会を開催することになっております。第5回評議員会は、下記のように開催いたします。

(1)日時…昭和62年2月21日(土) 14:00~16:30

(2)場所…大阪市立大学文化交流センター・大ホール(大阪駅前第3ビル16F (06)344-5425)

各科の評議員各位には別途詳細をご連絡いたしますのでよろしくお願ひします。

なお、昭和61年3月卒業の各科評議員は次の通りです。

機械…福美晃生、藤野竜二、電気…高倉仁史・筒井泰治、応化…須藤省吾、南 浩司、建築…越智建一、山根一三、土木…生島俊昭・志村友行、応物…上木雄詞・田上悦司

また、土木、昭和24年の評議員は前任の松下 勇様ご逝去のため池田良一様に引き継がれました。

#### 評議員の欠員補充にご協力下さい!!

当会の評議員は各クラス2名づつに増員する事になり、各学科の理事の方や評議員各位のご協力と補充作業を進めてきましたが、まだ完了してないクラスが可成り残っております。評議員会も近づいてきましたので早急に欠員を補充する必要があります。ご協力の程よろしくお願ひします。

## 工学部卒業生の皆さんへ

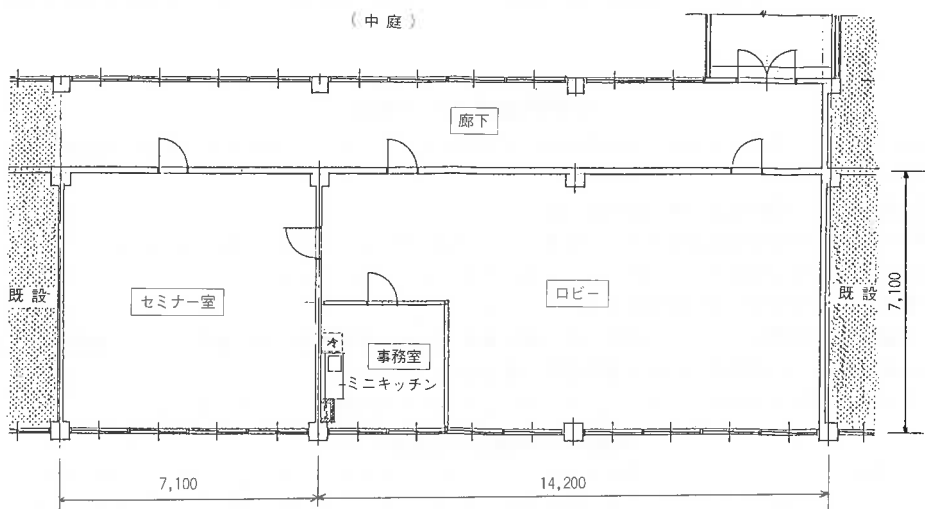
大阪市立大学工学部創立40周年記念事業  
実行委員会委員長 東野 一郎

卒業生の皆様方には各位の職場において益々ご活躍のことと存じます。

さて、去る昭和58年に工学部創立40周年を迎え工学部同窓生を中心とする、「工学部記念事業後援会」(会長井田憲治氏)が作られ、各種の記念事業が企画され、その大部分は既に成功裡に完了いたしましたことは既にご存じのこととあります。しかし、その一番の目玉である「工学部学術交流センター」(仮称)の建設のみが残っておりました。昭和59年7月より開始いたしましたその建設資金の募金活動は、当初1年間の予定で開始いたしましたが、その進行状況は思う通りとは行かず、その後、募金期間を更に1年間延長し、募金目標も6000万円に増額、企業の方々にもご協力をお願いしました結果、下記のごとく、ほぼ建設可能な金額に達することが出来るようになりました。これ一重にその間、卒業生の皆様方の格段のご協力に依るものであり、衷心より御礼申し上げる次第であります。ただ今までに、寄せられました募金の総額は、

1) 卒業生及び教員の部	金 23,963 千円
(教員には旧教職員を含む)	
2) 企業の部	金 22,980 千円
合計	金 46,943 千円

ただ今、記念事業実行委員会では、「建設実行委員会」(委員長川村純夫教授)を中心として、センターの建設に着手いたしました。建設場所は、予定を変更して、A棟の2階北端部、約200㎡の広さで、1/3がセミナー室、2/3がラウンジとなっています(図面参照)。そして12月初旬工事着工、来年3月末完成を予定しております。内部の施設につきましては、委員会で目下検討中ですが、来るべき情報化の時代に備え便利な機器類も整備して行きたいと考えております。このセンターの運営につきましても、卒業生の皆様と工学部の諸先生との学術の交流が気楽に出来る場所にしたい所存でありますので、完成の暁には、多数の卒業生の皆様方のご来学を希望する次第です。併せて大阪市立大学工学部の活性化の一助としたいものであります。



## 「崎山新学長の就任を祝う 同窓生のつどい」開催さる

## 事務局年報

(’85・12～’86・11)

すでに御存知の方も多いと思いますが、崎山耕作経済研究所教授(昭21年卒)が昭和61年4月1日付で母校大阪府立大学出身者としてははじめての学長に就任されました。その就任祝賀会が市大各学部同窓会役員有志の発起により、昭和61年7月23日(水)有恒倶楽部大ホールで開催され、160名の同窓生が参加されました。工学部同窓会からも会長他17名の理事・評議員が出席しました。このように、学長就任の祝賀会が全学部の同窓会の協力で開催されたことは、ここ数年来の同窓会連合会における全市大同窓会一本化への機運と、関係各位のご努力のあらわれとみることができます。



(パーティ会場での崎山新学長(左))

さて、当日の祝賀会では、崎山新学長のご挨拶のあと、当日の出席者の中で最長老の山中忠司さん(大正3年卒・94歳)の音頭による乾杯となり、あとは各学部同窓生が渾然一体となつての交歓や談笑がなごやかな雰囲気の中で進行了。当日は元学長森川先生や前学長木村先生もお越になり、新学長を励ましていらっしゃいました。

崎山新学長は、市大OBであるだけではなく、御専門分野が「地域経済」でもありますから、本学がユニークな「都市大学」として益々発展するよう御努力下さることが期待されます。先生のお話しによれば、大阪市大は大阪市内に残っている唯一の総合大学でもあり、国立大学のコピーにはなつてほしくないとのこと。また、市大の研究成果や作品を世に出し易くする「市大出版会」をはじめ、「熟年大学院」、や「入試制度」などやりがいのある構想やお仕事の課題をたくさんお持ちの由。市立大学同窓生としての崎山新学長には、個性あふれる大学づくりのためにこれからも御健康で存分に御活躍いただきたいと思つた次第です。(南 繁行 編集委員)

’86年3月…昭和60年度工学部送別式および卒業祝賀鏡割に、足立会長、東田副会長、理事有志が出席(24日)。昭和61年度学部・大学院合格者に会則、入会案内を配布し、準会員としての協力を要請(20日)。

4月…新入生の直接納入会費の受付(3～5日)。学内理事懇談会を開き、工学部創立40周年記念事業募金に対する同窓会からの協力呼びかけを検討(18日)。

5月…当会の初代事務局員としてご協力下さつた竹内みさ子さんご逝去(7日)。第3回理事会を開催し、①大阪府立大学第95回ポーター祭(5月17、18日)での協賛アドバルーン掲揚要請の受入、②支部規約の検討、③職域の先輩および当会評議員各位のご協力による創立40周年記念事業募金への同窓生に対する協力呼びかけ、④活動内容として、準会員への会報・名簿の郵送、評議員への伝達情報の拡大、慶弔の規約化などの検討等を決定(9日)。昭和61年度特別基金積立を郵便局へ預入(14日)。当会独自の40周年記念事業募金への協力呼びかけのために職域代表(141社、236名)および当会評議員(221名)各位に依頼状等郵送(31日)。

6月…都土六木会第8回総会に事務局担当理事が出席(7日)。

7月…会報第6号編集委員会の初会合を開催(23日)。各学部同窓会役員有志の発起による崎山耕作(昭21年商大卒)新学長の就任祝賀会〔有恒倶楽部大ホール(大和銀行本店ビル7階)〕に足立会長他理事、評議員17名が出席(23日)。

8月…第2回会報編集委員会を開催し、会報内容および会報名称の取扱いを検討(21日)。

9月…第3回会報編集委員会を開催、会報名称の変更の件は理事会に検討を要請することに決定(24日)。大阪府立大学創立106周年記念音楽祭(100周年以降毎年開催)の実行委員会から協賛広告掲載の依頼(9日)。

10月…第4回理事会にて、①会報名称の変更は、評議員会の論議も経て慎重に対処、②記念事業呼びかけ経費の決算、③第8期(’87・1～’88・12)役員候補の選出スケジュール、④市大創立106周年記念音楽祭への協賛、および⑤第5回評議員会を’87年2月21日(土)、市大文化交流センターで開催等を決定(17日)。

11月…市大創立106周年記念音楽祭(杉本キャンパス内田中記念館で開催)の実行委員会が当会役員を招待(16日)。関東支部が第二回会合を開催(22日)。第6号会報を発行(25日)。

12月…第6号会報を郵送(15日)。

「来年12月には会員名簿第6号を発行の予定です」

大阪市立大学工学部の電話番号が、06-605-(下記番号)の直通になりました。(1986-3-1実施)

機械工学科	電気工学科	応用化学科	建築学科	土木工学科	応用物理学科
藤井 太一 2660	堤 四郎 2676	平井 竹次 2693	川村 純夫 2706	園田恵一郎 2722	村井 昭 2738
水川 清 2661	鈴木 裕 2677	五百井正樹 2694	木内 龍彦 ♪	小林 治俊 2723	西村 仁 2739
福田 武人 ♪	南 繁行 ♪	太垣和一郎 2695	下島 正孝 2707	鬼頭 宏明 ♪	曾我部 伸 2740
逢坂 勝彦 ♪	志水 英二 2678	幸塚 正児 2696	木本 英爾 ♪	三笠 正人 2724	森 雄造 2741
兵働 務 2663	松下 賢二 2679	玉垣 誠三 ♪	日置興一郎 2708	高田 直俊 2725	美馬 宏司 2742
野邑 奉弘 2664	重田 和夫 ♪	荻野 健治 ♪	坂 壽二 2709	東田 淳 ♪	藤井 康夫 ♪
西村 伸也 ♪	安藤 慶一 2680	大津 隆行 2697	那谷晴一郎 ♪	望月 秋利 2726	大倉 薫 2743
森島 直正 2665	青笹 正夫 2681	山田文一郎 2698	村上 益美 ♪	本田 淳裕 2727	笹沼 道雄 2744
東部 誠 ♪	草開 稔 ♪	圓藤紀代司 ♪	成瀬 哲生 2710	山田 優 2728	石黒 英治 ♪
布 恒雄 2666	山下 一美 2682	松本 章一 ♪	太田 洋一 2711	貫上 佳則 ♪	人見 宗男 2745
上田 祐男 2667	細川 省一 2683	原納 淑郎 2699	新居 洋子 ♪	真嶋 光保 2729	北田 忠義 ♪
深井 完祐 2668	岡本 次郎 2684	矢野 元威 2700	大倉 良司 ♪	西村 昂 2730	串部 宏之 ♪
南斎 征夫 ♪	浜 裕光 ♪	大嶋 寛 ♪	多胡 進 2712	岡村 治子 2731	横田万里夫 2747
玉村謙太郎 2669	藤井 知生 2685	小郷 良明 2701	杉山 茂一 2713	日野 泰雄 ♪	谷本 脩 2748
上神謙次郎 ♪	渡辺 博己 2686	木下 雅悦 2702	中野 明 ♪	小田 一紀 2732	鶴飼 正二 ♪
森元 時夫 2670	森下 昂 ♪	仲矢 忠雄 2703	福田 晴慶 2714	久保 直 2733	
若林三記夫 ♪	建部 涉 2687	国枝 紀夫 ♪	三輪 雅久 2715	角野 昇八 ♪	
東野 一郎 2671	前川 義治 ♪	山内 清 ♪	濱田 学昭 2716	中井 博 2734	
守田 栄之 2672	奥本 隆昭 2688	三浦 洋三 ♪	赤崎 弘平 ♪	北田 俊行 2735	
渡辺 紀彦 ♪	藤原直賀人 2689		斎藤 和夫 2717	酒造 敏廣 ♪	
秋山 貞夫 ♪			田中 康夫 2718	阪野 雅則 ♪	
中山 守 2673			三輪 嘉男 2719		
					<b>事務室等</b>
					教 務 係 2653
					庶 務 係 2651
					図 書 分 室 2657
					守 衛 室 2096

## 「会報名称」その後

前号の編集委員会の方針(第5号12頁)では、本第6号から新しく会報名を付ける予定に致しておりましたが、さらに時間を設けて検討を重ねることになりました。以下はその経過の要点ならびに会員の皆様へのお願いです。

この会報名称の件につきまして10月の理事会で長時間にわたり種々議論をしていただきました。その結果、(1)今少し時間を設けて、(a)この件を同窓会そのものの名前を考える問題(会報の名称は会の名前から派生的に決まる)としてとらえるか、あるいは(b)会報の名称・ニックネームのみを考えることに限定するか、について、名称を決定することの是非をも含め理事会のみならず評議員会においても議論を深める方がよい、(2)そのために会員の方々からも広く御意見をいただくようお願いしよう、と云うことになった次第です。

多数の方々の御意見をうかがえる場としてはさしあたり来年2月の評議員会がありますが、同時に広く会員の皆様からこの件について活発な御意見を同窓会事務局宛に賜りたいと存じます。「工学部学术交流センター」の完成を期に、との声もあり、奮って御意見をお寄せ下さるようお願いいたします。(編集委員会)

## 編集後記

11月半ばの季節になりますと、工学部前のキャンパス大通りでは彩づいた枯葉が終日舞い落ち、かの“第三の男”のラストシーンにも勝るほどの趣きある雰囲気をも出し出しております。

本号では、特集記事として、来春退官されます藤井先生、東野先生、三笠先生に御寄稿をお願いしましたところ心よくお引き受け下さり、30余年の大学生活を振り返っての心境を認めていただきました。味読いただきますと、各世代の卒業生それぞれに、心中種々去来するものがありではないかと存じます。

さて、来年は同窓会々員名簿発行年となっておりますので、従前の慣例により会報の発行は休ませていただきます。次号の同窓会報は二年後にお手元にお届けする予定です。

最後に会員諸兄姉の御健康をお祈り申し上げます。

## 第6号会報編集委員

南斎征夫(機39)、南 繁行(電45)、大嶋 寛(化49)  
赤崎弘平(建45)、望月秋利(土42)、石黒英治(物40)  
人見宗男(機31)。